

教育の現代化

足利市立第二中学校教諭 名 淵 裕 二

はじめに

わが國が明治以来の百年間に非常な近代化をなしとげ、特に敗戦の廢虚から世界有数の高度な工業國に成長したことの要因として日本の高度な徹底した教育の果たした大きな役割をあげることができるだろう。戦後20年、いまや社会の要請にこたえるべく教育が大きな局面に立たされていることである。ことしは明治百年、各地で百年を祝う行事がくりかえされることだろうが、明治五年学制発布以来幾多の改変がなされて、今日にいたった教育体制の中でわれわれは歴史のあとをふりかえり現代に生きる気構えを再考するのも意義あることではないだろうか。

大衆的高等教育の普及

日、欧、米比較文明論 加藤秀俊

アメリカと日本とどこが似ているかという、第一は大衆的高等教育の普及である。最近の大学生および大学卒業生の全人口に対する比率、最近の比較統計によるとアメリカ40%、日本30%、これは西欧諸國にくらべて問題にならないほど高い。イギリス4%、フランス3%と日米の大学進学率は西欧とケタがちがうのである。長期予測によると日米両國では今世紀の終わりまでに大学進学率は70%を越えるようになるという。しかしイギリスやフランスでの大学生の数はほとんど成長していない。大学生を含めてヨーロッパの知識人というのは相変わらず少数者なのである。少数者であって特権階級なのである。大学を出ていれば、それだけでそれにふさわしい地位や収入が約束されている。かれらは明白なエリートなのである。それにくらべると日本の大学は物量主義で、大学を出たからといってエリートというわけにはいかない。まさに大衆なのである。日本の学生たちがアルバイトに狂奔し、授業料値上げのストをやったり、学生数が多いことの代償として教育機能が粗い、とりわけ日本の大学は多くの怠惰な学生をかかえこんでいる。そのうえ、よほどのことがない限り落第ということとはあり得ない。いったん大学に入れば自動的に卒業できるようになっている。だから日本およびアメリカの平均的大学毕业生とイギリスやフランスのそれを「個人」としてくらべてみることもできるとすれば、ヨーロッパ型インテリの方が日米型のそれより人格識見にも高いと考えて差支えないだろう。ここで指摘した事実は日米社会では高等教育が「大衆化」している事実なのである。日本の現状では高等学校教育が大衆化し一般化しつつある。進学率は年を追うごとに上昇し現状では71%に躍進している。これまた物量主義になり後期中等教育も多くの問題をかかえている。いわんや、前期中等教育の中学校においては高等学校進学の上昇にともない、進学競争の激化を招き、多くの問題点をかかえている現状である。なぜこれだけの進学者が発生したのかその原因を究明するよりは、われわれ教育に携わる教師が現時点においてこの問題とどう取り組み改善していくかに焦点をしぼって考察してみよう。新時代をみざして世界の教育はそれぞれの現実に即して構想を立てているが、当面する課題として次の点について考えてみたいと思う。

教育過程の改善をはかる

小学校教育課程の改善について中間発表があった。その中で特に気づかされることは、全人形成の教育を主張していることである。「日常生活に必要な基本的な知識や技能」「強健な身体と体力の基礎を養う」「豊かな情操や強い意志の素地を養う」ことがあげられている。このような全人形成の教育は世界共通のものであり今日の重要な教育の流れであると思う。また「小学校の各段階における児童の心身の発達と特性に応ずる指導」がなされねばならない。ここでいう特性教育は個性の伸長、才能教育だろうと思う。現代の教育では児童生徒の教育が固定化されていて、個性、才能に応じた教育がゆがめられている。中学生の段階になると大きく能力の差が生じてくる。しかし義務教育であるから能力差の大きい生徒を同じように入れて指導を行なっているが、これでは時代の要請にこたえる個性伸長、才能教育、創造性を生かす教育は思うに任せられない。外国では最近著しく児童生徒の優秀な才能、技能を生かす教育が進んでいるように思う。日本の場合、民主主義とは言っても、日本固有のしきたりがある現状では能力別学級編成などは至難なことなのだろう。少し飛躍した論になるが教育の平等公平とはその能力に応じて与えられるものであって単なる法制度上の平等公平であってはならないと思う。能力のある子もそうでない子も、その子なりの能力において、すべての人間が全力を傾けて努力するような教育が重要なのである。こうした公平な教育には一方テーチングマシンとかプログラム学習の開発が必要であり、他方では科目ごとの能力別学級編成による学校運営が必要だと思ふ。中学校には選択教師の制度がとり入れられたが、これまた学歴偏重のしきたりが影響されてこの制度は忘れられようとしている。ほんとうに生徒の幸福を考えるならば学歴よりも、能力特性に応じた教育を施すべきである。従来は教科の学習に重点がおかれ、人間形成に欠くべからざる他の領域が軽視されがちである。これは車の両輪のようなものであり、両輪とも円滑にまわるはずなのに教科の面ばかりが変に回って他の領域はほとんど回らない現状である。中学校教育の目標の一つに「進路、特性に応じた教育」の必要が示され、学習指導要領においても、学級活動を中心として指導内容がかなり具体的に示されているが、現状においてはいろいろな理由から必ずしも充実した指導が行なわれているとはいえない。学活における40時間以上の指導も特活の性格からみて不安定だし、さらに進学偏重の個別指導などたくさん問題をかかえている。今回の教育課程の改善にあたって「進路指導の位置づけ」や内容が問題にされるべきであろう。いずれにしても教育課程の改善に伴い4領域についての調和と統一をはかるべきである。

1. 入試制度の改善をはかり、教師、生徒の過重な負担をなくす。
1. 生徒の適性、能力に応じた進路指導の充実。
1. 大衆高校教育の多様化とこれに応ずる中学校教育体制の充実、早急に改善しなければならない問題であろう。

教育条件の整備改善

教育の中に機械を導入し、指導の能率を高めようとする動きは学習指導の近代化の中で特に活発になってきている。集団学習の形として進められているものに視聴覚教育の運動があって、幻燈機、テ

レビ、録音教材などいずれも視聴覚的な方法を最大限にとり入れて学習の能率を高めようとするものである。また個別指導の形としてティーチングマシン、プログラミング、シンクロファックスの検討が真剣に行なわれている。一実用化の機械授業—アメリカの教育の近代化、いま日本も研究検討が行なわれ実験的に取り入れられている。最近ティームティーチング方法が叫ばれてきている。教師の相互協力による学習法であり、閉鎖的な学級を破る新方式であろう。同じ内容を何人もの教師が同じように指導している現状の指導体制を破って専門の教師が児童生徒を弾力的に編成し、したがって教育内容を改善し効率をあげようとする方法である。本校においても、すでに英語数学の授業にシンクロファックスによるシート学習、国語科におけるテープレコーダーによる録音教材の効果的利用、漢字カードによるドリル学習、社会科におけるティームティーチング方式による単元の展開計画の作成、英語科における「学習時における評価のためのチェックリスト」の利用など学習指導の近代化に意欲的に取り組んでいる。ティームティーチング方式が発展して従来の学級とか学年制をうち破る時が案外早くくのではないか。こういう近代化の流れの中で現状の施設、設備ではどうしても間に合わなくなり、近代化を促進することは急務でありながら施設、設備の開発に要する膨大な費用の問題、教育界に優秀な人材を送り込む問題、教員の専科制、組織等今後検討されるべき問題であり、この理想と現実のジレンマをどう解決していくべきか。以上大まかに現代化の方向を述べてみたが、この中で特に教育者の資質の向上を考えてみたいと思う。一方ではマシン偏重の教育観をいましめる声も多い。教育とは結局高度な精神活動で機械が代ってやれる分野はその一部にすぎないという意見、機械に組めるプログラムには限度があり、英才教育には使えないという意見もきている。しからは教育の充実発展は教師の資質に負うところ大である。教育が機械化されて、個別指導、特性に応じた教育、創造性教育など、生徒の本来の能力開発に役だつとしても人間性の教育に寄与する面は少ない。これまで以上に教師の研究意欲と資質の向上が要求されてくると思う。機械文明の高度の発達に伴う「人間性の喪失」にも着眼しなければならない。「教育は人にあり」これは永久不変の真理である。安易な技術主義、機械主義に押し流されてはならない。

指導方法の改善

「移転できる能力」ということが叫ばれている。ブルナーによれば「教育とは学習者に自分が学んでいることをはあくし、変形し、移転する能力を進展させるような問題や一群の知識を説明と再説明の順次性を通じて、学習者を導いていくもの」だということになる。われわれは限られた時間内で限られた学習量で何を教えることがたいせつであるかを明らかにしなければならない。一例を国語の指導法の改善について考察してみたいと思う。

戦後、主体性とか自主性ということが問題になり、いずれの研究会にもこのことで終始されているようだが、たしかに自主的に問題を解決しているとする積極性が足りない。問われたことには答える。自分から学ぶという意欲が足りない。そうした原因がどこにあるのか考えてみたい。いろいろ考えられるが、ひとつには日本語がむずかしいこと。言語負担が重すぎるので理解するのに精いっぱい自分がそれを消化してどうするというよりとにかく教えられたことを理解しなければならない。自主的にやるといったって消化しきれないからやらない。問答形式の授業にも問題がある。小学校のこ

るは先生に指されることを喜んでわれ先にと答えているが、中学生になるとなかなか答えない、ばかりかしいという意識が出てくる。そこで話し合いの技術、態度が身につけていない。共同学習の意識が乏しいということもある。彼らにはライバル意識が強く協力してやろうという精神が薄くそれだけ授業に対する熱意も欠けてくることになる。このことは生徒の側ばかりでなく教師の側にも大いに反省するところがあると思う。安易な問答形式の授業は軽率なうすっぺらな考えの子どもをつくってしまい危険がある。あちこちの研究授業を参観して感ずることは子どもが一時間にぎやかにやる。問答形式一点ばりの授業をやっているのです。即問即答の授業に終わってしまふ。現代は「対話」の時代といわれているが、真の対話こそ国語授業の中核になるのではないか。話すときは聞く人の立場になって話し、聞くときは話す人の立場になって聞くという両者のつながりがなければ対話にならない。話すことの訓練は比較的行なわれているが、聞くことの訓練はそれに比べるといい加減にされている傾向はないだろうか。話すことの技術、聞くときの態度、両面についての努力が必要である。「3人寄れば文珠の知恵」これは話し合うことによっていい知恵がうまれるだろうということである。集団思考もこの対話があってこそ、その価値が見い出されるのである。ある新聞に「学力とは何か」という記事で東大の大田教授は「テストが持っている弱点は問いと答えの距離が短くなるということだ。実は問いと答えの間で人間は成長する。教育の呼吸作用ともいえるだろう。長い呼吸ができなくなる場所にテスト的学力の弱点がある。」といている。学力にもいろいろな学力観があると思うが、その学力観の間にも大きな共通点があることも事実である。それは正確な基礎知識が学力の重要な部分を占めていることである。

疑問-答え-反問-壁-突破-発見といった子どもたちのドラマが教室という世界のなかで展開されることである。みんなが考え、緊張し、疑い、発見していく過程が大切なのである。また学力とはそうした過程を通ることができる力だと思ふ。この立場でいえば学力とは、学習によってわがものとしてすることができる生活力やエネルギーであるという広い意味にもとれると思ふ。また学力の中で非常に大切なのは機械的に測定できないもの-意志力、思考力、適応力、創造力、指導力といったもろもろの「力」であるといえる。

読むことの指導では、発問が大切な役割をもっている。読めばそのまま書いてあるような発問は無意味であり思考力は育たない。発問が授業をすすめるために、たいせつなカギであるということだけは誰もが知っている。発問がまずかったために授業に失敗した経験はあるだろう。「発問のしかたはどうすべきか。」ということはいく問題にされるが、日常の授業においては意外に忘れられてはいないだろうか。言語行動には伝達-言語で伝える。思考-言語で考える。創造-言語で作られる。という三つのはたらきがあるといわれている。この言語観にたつて特に思考のはたらきからは必然的に「思考なしには言語活動はありえないし、言語なしには思考活動はありえない。」ということが考えられよう。学習指導要領のねらいに「日常生活に必要な能力を養い、思考力を伸ばし、心情を豊かにして言語生活の向上をはかる。」をあげている。これは国語の能力を養うことと、思考力を伸ばし、心情を豊かにすることが一体の関係にあることをはっきり示しているのである。考えさせる時間、間をおくことが必要である。いいかえれば、生徒が活発な思考活動ができるような発問のくふうを忘れてはならない。また教師の側にも生徒に教わるということがある。生徒の言動を通して自己内部を反省し

くふうすることでもある。研究授業というよくグループ活動をやるが、グループ学習には非常に反省する点が多いと思う。いろいろな意見が出て班の代表が一つにまとめて発表してしまう。その一つにまとめてしまうところに問題があると思われるのです。問題によっては結論的なまとめは出さないほうが良い場合だってあるし、いくつかの意見が出て、その出たところに価値があるのであって、自分と違う意見をきくことにも意味があると思う。それをまとめてしまって主題はなんだとか要点はなんだとか結論をまとめなければ承知しないところに問題が残るわけです。もっと集約的そして核散といったはばというか余裕があっていいと思う。

次に課題学習について考えてみたいと思う。

・自主的主体的学習というとき何よりも教師の課題の与え方、そして生徒の学習意欲の喚起、これが重要なポイントになると思う。学習することの価値を意識したり、そこから学習の目的を確立したりその目的にそって学習のしかたをくふうしたりして課題を自らつくることが自主学習としてだいじなことだと思う。単に国語だけの問題じゃなく学校全体の方向が自主的方向に向いていないと自主学習など徹底しません。特に国語は自主学習が強調されなければならないと思う。それが徹底すればすべての学習を通して国語が学べるわけです。これからの課題としてより強力に読書指導を広めていきたいと思う。映像文化にばかり向けられている生徒の姿勢を読書文化に向けさせ、豊かな感想をもたせ意見をもちそれを文章にしてみる方向へ指導すべきだと思う。それと同時に作文教育を重視したい。やや長い、まとまった文を書くということは物事をとらわれない立場で観察し自分なりの考え方をもち、創造力を養うのに大いに効果があると思う。

学校教育がすべてではない

元来教育とは家庭と社会と学校とが果たすべき分野である。その中で学校は学校なりの役割を果たして行くべきものである。ところが現状の姿は学校の先生に教育のすべての責任を負わせ、家庭教育の役割までも学校に要求するというをやめないと全人教育をする場がなくなってしまう。たとえば非行少年がでたとする。警察が連絡をとるのは学校であり、担任の先生である。よく新聞などにも出ることであるが、きまって校長の「申しわけない。」という談話がのっている。アメリカなどではまず親が呼ばれて注意を受けるそう。つまり現状では日本の先生は46時中責任から解放されることなく、教育といえは学校教育がすべてである。学校だけで勝負させるような感覚が、学歴偏重とか入学試験地獄、学閥という社会問題を生む大きな要因になっていると思う。今や社会はあらゆる面でめまぐるしく革新が行なわれており激しく変化を続けている。産業界でも学歴偏重をやめ、人間尊重の立場から能力主義的な人事管理を行なり努力を続けていかなければならない。そうした社会構造の中で学校教育だけが旧態依然としていていいのだろうか。根本的には学校、家庭、社会それぞれの果たすべき教育的役割を明確にすべき時期にきていると思う。学校の先生に教育のすべての責任を負わせ、家庭教育の役割までも学校に任せ要求することを早急に改めないと学校では全人的な人間教育を養成する場がなくなり、時代の要請にこたえることはできなくなってしまうだろう。そうしたいろいろな面で改善が、学校教育を一点二点争うような受験地獄から幾分でも解放し、より人間的教育に力を注ぐことを可能にするだろう。